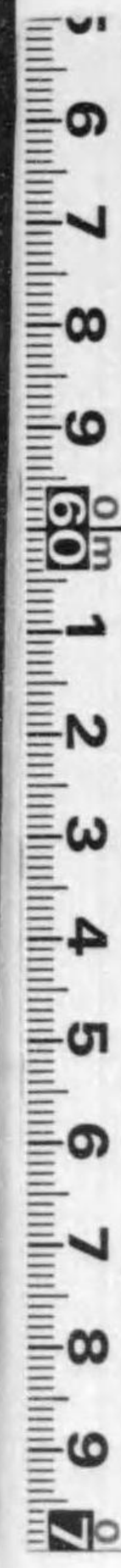




328
374

古今役者物語



始



125F-82



解題

「役者物語」といふ書のある事と、其の内容の一部分は種彦翁や只誠翁の著書に孫引されて知つて居たが、原本は京都大學に一部あるだけと聞いて未だ實見する事が出来なかつた。
 其の後、松廼舎主人の許へ購入されて始めて原本を見る事が出来た。こゝに複製せられたのも同主人の蔵本に據つたのである。

卷末は「延寶六年」といふ年次が明記されて居る、延寶六年といへば元祿元年から丁度十年前で若衆歌舞伎が禁止されたといふ承應二年からは實に十六年後に當る。斯ういふ昔の演藝書報が今日まで残つて居るのは誠に不思議と言はねばならぬ。

卷頭の本文を見ると、江戸の歌舞伎が盛大であるのを、遠國の人や、御屋敷の奥女中たちは物する事が出来ぬから此の書を拵へたと書いて居る、これ二百五十年前の著者も全く當時の演藝書報として此の書を作つた事が明らかである、そして第一頁に中村座、市村座、坂東座後の山田座、山田座と、謂はゆる江戸の四座が列記されて、其の俳優たちの連名がある。右のうち山田座は奥女中江の島一件で、此の書が出版されてから卅六年後に没落して、以後の江戸歌舞伎は三座となつたのであるが、本書は其四座が現在した時代のものとしても考古の價値がある。

卷頭の本文に「名高き太夫」として「彦作、かん三郎、右近源左衛門」「玉川千之丞、主膳」などの名が見える。そうして其の「主膳」は諸國修行の身となり「瀧井山三郎」は既に死んだとある。これらは演劇史の材料として見免すべからざる事實である。

挿繪には、先づ中村座と市村座との木戸口が描かれ、その木戸の看板には當時演せられた脚本の題號が記されて居る。中村座のは「武士四天王初」といふ大名題、市村座は「平これもち千種の花見」といふ大名題で、更に小名題が色々列べてある。當時の芝居町とそうして當時の狂言とが

4. 11. 8
購求



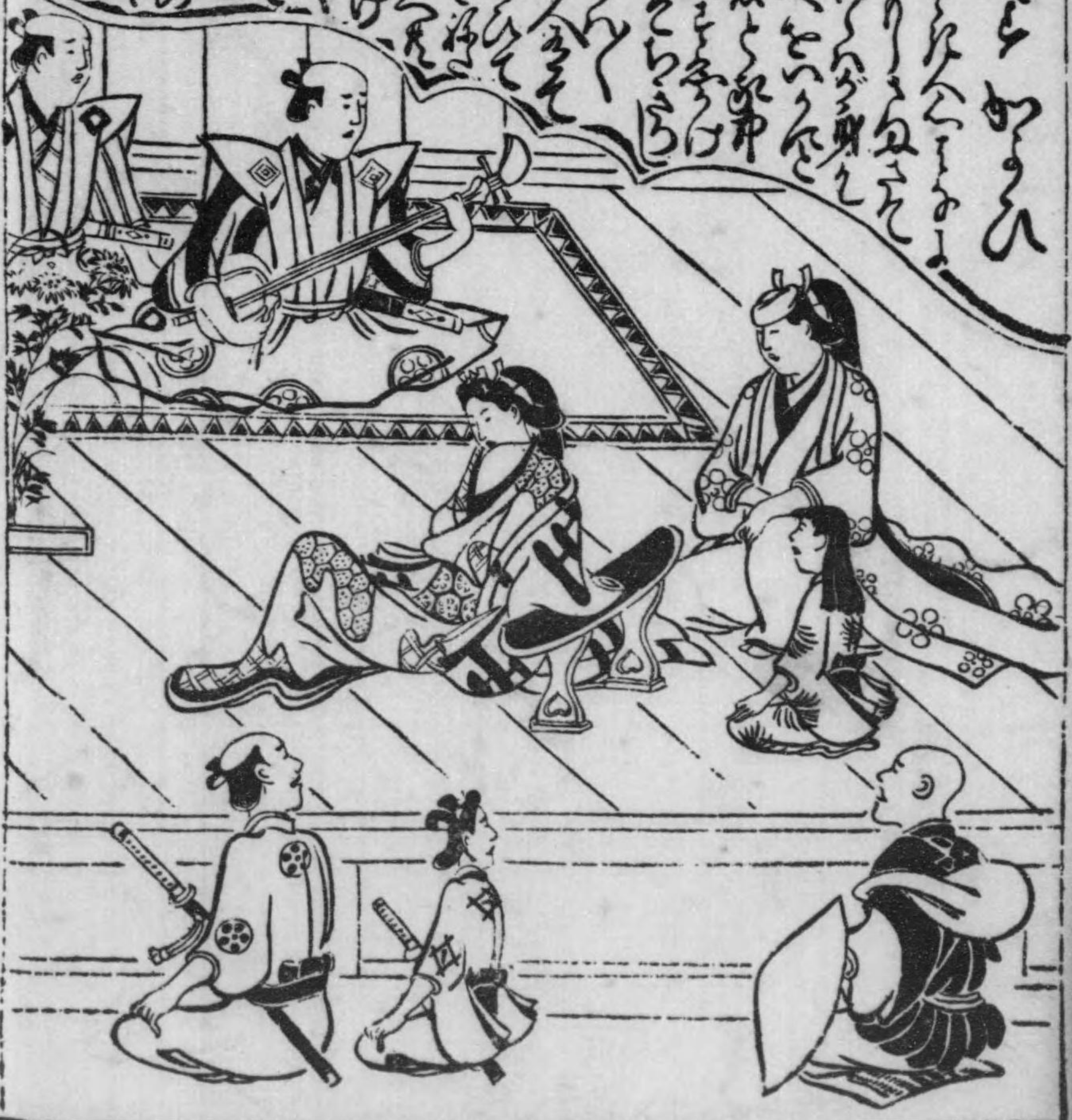




ひりりあはれ
 むののちむ
 とまのひん
 ひさのち
 さあねあ
 りの月の
 つまのて
 むのま
 くわあ
 わとあ
 けのち
 つけ
 あ
 よ
 し
 のち
 さ



ちりあはれ
 むのちむ
 とまのひん
 ひさのち
 さあねあ
 りの月の
 つまのて
 むのま
 くわあ
 わとあ
 けのち
 つけ
 あ
 よ
 し
 のち
 さ



終

